人魚のはなし

Pre.

人魚のはなし

南風野さきは

片足靴屋/Sheagh sidhe

人魚のはなし 目次

人魚のはなし　5
詩人のはなし　19
学者のはなし　25
書店のはなし　51

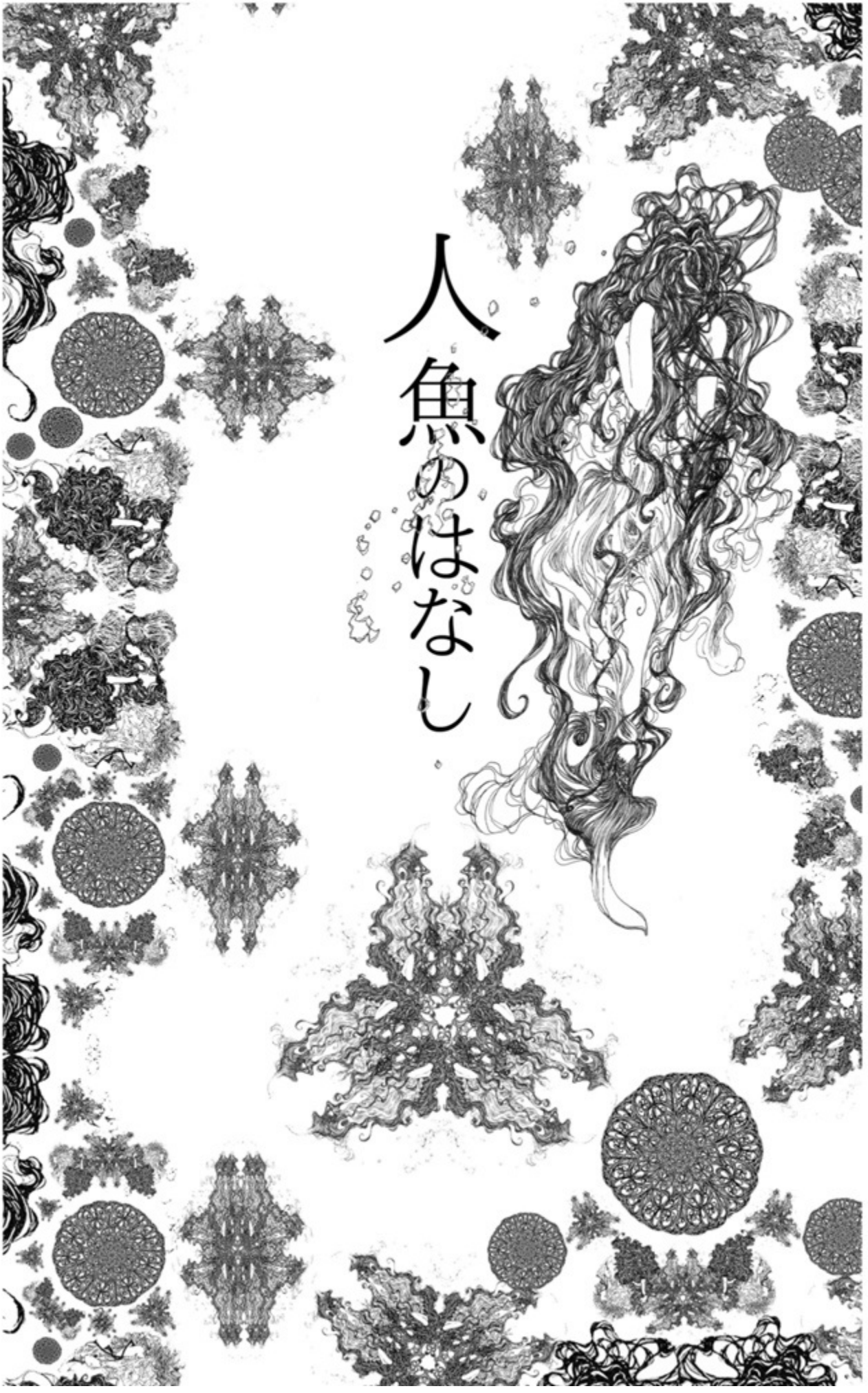
【引用/各話冒頭】

W.B.イエイツ編 井村君江編訳『ケルト妖精物語』筑摩書房 1986年

C.ノディエ著 篠田知和基編訳『ノディエ幻想短篇集』岩波書店 1990年

J.G.フレイザー著 永橋卓介訳『金枝篇(三)』岩波書店 1954年

ノヴァーリス著 今泉文子編訳『ノヴァーリス作品集Ⅰ』筑摩書房 2006年



人魚のはなし

ねえ、あなたはわたしを食べるおつもりなの？

Irish Folktales

酷暑の残滓が地にわだかまり、噎せるような潮の香を夜風が運んでいた。
崖上の集落へ続く海辺の道を、覚束ない足取りの若者が歩んでいた。酩酊に導かれた心地よい蒙昧に身を委ね、上機嫌で左右にぶれながら、若者は道をのぼっていく。若者は船乗りで、崖下の集落にある酒場で飲んだ帰りだった。
寄せては返す波音が、幾重にもかさなり轟きを産む。水平線はぼやけ、上澄みの夜は澄みわたり、無数の星が瞬いていた。
波飛沫すら闇に融ける断崖の、淵に近い曲線で、脚のもつれた若者は大きく道から外れた。砂礫が崖を転がり落ち、轟く潮騒が若者の耳を塞ぐ。浮遊を伴う轟きに、酔い痴れて夢に溺れる若者は、声をあげて無邪気に笑った。
吹きあがる風が波音を打ち上げる。耳をかすめた落下の音に、若者は初めて焦操を覚えた。
足を踏み外し、崖から落ちる若者は、声をあげることすらできずに天球を仰ぐ。
「おいおい、大丈夫か」
無骨な短い指が、若者の落下を妨げた。夜にすら映える朱の髪と、目の冴えるような緑の服が、引きあげられた若者の目に飛びこんでくる。岩と砂の混淆たる地に転がり、いまだ恐慌から抜け出せずにいる若者の目は、焦点の定まらないまま緑の服の小男を映した。
「ありがとう、たすかった」

角の磨り減った滑舌に、しゃがみこんで若者を覗きこんでいた小男は呆れたように鼻を鳴らした。
「家まで送る。足取りが危ういったらない。崖上の集落に住んでるのか？」
若者を助ける折に放ったのか、少し離れたところに転がっていた籠を小男は拾い上げる。蔓草で編まれた鳥籠のようなそれは、何かを囚えているらしく、編み目の内側から薄ぼんやりとした光を放っていた。
ランプのように籠を提げ、先を歩く小男を、立ちあがった若者はよろめきながら追いかける。松明でもカンテラでもない光が、潮騒に溺れる夜道を仄かに照らし出していた。追いついてきた若者の問いかけるような眼に気づき、小男はからかうように唇を歪める。
「海に漂うものを蒐集するのが趣味でね」
「海に漂うもの？」
「たとえば、難破船から漂ってきた魂、だな」
若者が身を強張らせた。小男は豪快に笑ってみせる。
「冗談だよ」
海原を駆けてきた潮風が、鮮やかな朱の髪を掻き回した。風に押されるように、小男は若者の前に出る。若者は小さな背中を追う。
「噂じゃ、あんたの嫁は人魚なんだってな」
前を見据えたまま声を投げてくる小男に、若者は自慢げに頷いた。

「そうだよ。俺の嫁さんは人魚なのさ」

ゆらめく光の網が、水底を撫でるように、若者の瞼をとらえた。微睡に溺れる若者を叱咤するように、疼痛の漣が眉間の奥から寄せては引いた。空へと踏み出した太陽が、世界に光を溢れさせる。宿酔の針が目覚めを促し、億劫そうに瞼を持ち上げた若者の眼前には、海流にたゆたう褐藻の森のような、氾濫する光に梳かれる豊かな髪があった。

「おはよう？」

若者の身じろぎは、若者と同じ寝台で眠っていた女を爪弾き、脳髄を絡め取るほどに甘く、骨の髄まで沁みこむ爽やかな声を響かせた。珊瑚の色で飾られた、ちいさな爪先が寝台を這う。細い脚が若者のそれに絡まり、小振りな乳房が砂を食む貝のように若者の胸に吸いついた。無骨な腕に抱かれて、女は若者を見上げる。

「夜おそく、ひとりで帰ってきたの。覚えてない？」

晴れた日の海そのものであるかのような碧の目が若者を見つめた。輝きを撒く真珠の肌はすべらかで、血潮そのものの唇は可憐に結ばれている。奔放に流れる艶やかな髪を纏い、肢体を光に溺れさせている妻に、若者は困惑を示した。

「覚えてない」
「そう。みんなと呑みすぎたのね」
声に笑みをふくませ、女は怒ったような顔をつくる。ほそく白い腕が、若者の肩に触れた。
「たのしいお酒だった？」
狼狽する若者を、女は抱きすくめる。窓から流れこむ朝陽は眩く、潮の音は絶えない。
「あなたはまた海へ出てしまうけど、わたしはここで待っているわ。だから、帰ってきてね。わたしのところに帰ってきてね。なにがあっても、帰ってきて」
淡々と、間断なく浜の砂をさらう波の繰り返しのように、女は謳う。波に弄われて砂となった珊瑚のように、波に遊ばれて砂となった貝殻のように、繰り返される哀願は光の海へと沈んでいった。

集落へと続く道の際にある崖で、女は水平線に沈みゆく太陽を見つめていた。
水平線は黄金に染まり、夜は天頂より降りてくる。空と海の境目は霞んでいて、姿を隠した太陽の残滓が、朱金の煌きとなって夜と融けていた。吹き上がる風は勢いを増し、女の髪を掻き乱す。
やがて天球を昇り始めた月につられるようにして、海は水位をあげていく。
優しく頬を包みこむような潮風に撫でられながら、女は海を見つめていた。

「心配か？　もしそうなら、どうして船乗りの妻になんかなったのかね」
背後から投げかけられた男の声に、女の華奢な肩がはねる。ゆっくりと振り返った女の眼の先には、朱の髪を風に靡かせた、緑の服の小男がいた。
「会ったの？」
挑むような碧の目が、小男の提げた空の籠を一瞥した。
「ここから落っこちかけてたのを助けてやった」
愉しげに、小男は唇を歪ませた。
「感謝しろよ、ここにいるのはおまえの旦那の命の恩人だ。そのまま落としてもよかった」
女の目が鋭くなり、怒気を帯びた。小男は大仰に宙を見上げる。
「そうすればよかったのか。あいつがいなくなればおまえは俺のところに戻ってくるだろ。あの水底の家に」
小男は片足でくるりと回り、空の籠を天高く放り投げる。
「気づいているだろうが、ひと波乱ありそうだ。旦那、無事に帰ってこれるといいな」
空の籠は一瞬だけ月を捕らえ、蔓の網目から冴えた光を零した。月光に曝されながら、小男はからかうように女を見遣り、はしゃぐように踊ってみせる。
落下してきた籠が崖の砂礫を叩いた時、海原を見下ろす月に照らされていたのは、唇を噛んで佇む女だけだった。

人魚のはなし

著・画　南風野さきは

発行　片足靴屋/Sheagh sidhe

発行年月日　2014/09/20

初出　「詩人のはなし」（小冊子/Puboo）2013/05/05

http://p.booklog.jp/book/71079

HP　片足靴屋/Leith bhrogan

http://id12.fm-p.jp/20/LIR/

Twitter　@SAKIHA_HAENO

印刷所　コミックモール様（文伸印刷株式会社 内）

http://comicmall.jp

著作権は著者に帰属いたします。

この物語はフィクションであり、実在の人物・地名・団体とは一切関係ありません。

人魚のはなし

http://p.booklog.jp/book/89869

著者：片足靴屋/Sheagh sidhe
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/leithbhrogan/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/89869

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/89869

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ